

## 巻頭言

生きる

Be alive

佐藤 保

Tamotsu SATO

洋の東西を問わず、また昔も今も変わらず、ヒトは「生きる」ために苦心惨憺の努力を重ねてきた。「生きる」ということは、つまりは「死なない」こと。すべての生物がなぜ等しく死滅を恐れるのか、それは生物的本能という以外、私にはよく分からないが、ヒトは他の生命体に比べて死への恐怖がより強烈であるようだ。思うに、ヒトはもともと生物としては弱者に属し、臆病な種であったに違いない。だから逆説的に言えば、生物界の弱者であるがゆえに必死に「生きる」ための狡知をめぐらしたヒトが、結果的には現在地球上の覇者となり得たのであろう。

ヒトはとにもかくにも、「生きる」ことに食欲である。老いさらばえ、病み疲れて、やがて死を迎える生物としての必然を、決して唯々諾々と受け容れようとはしない。いつまでも若々しく、活力あふれる「不老不死」の生こそ、ヒトが誰しもいなく永久不変の夢である。そして、ヒトの文明といわれるものはすべて、このいつまでも見はてぬ夢から生み出されてきた。例えば、ヒト・ゲノム解析やクローン技術の開発など、現代の最先端を行く自然科学分野の学問も、もとをただせばみな「不老不死」の夢に結びつく。

ほぼ四千年の歴史をもつ中国文明もまた、すべては「生きる」ための努力の積み重ねにほかならなかった。その長い間の苦心の軌跡は、ジョセフ・ニーダムの大著『中国の科学と文明』（日本語訳は全10巻、思索社）などに詳しいが、上は皇帝から下は一般大衆に至るまで、あげて老衰と死の恐怖から逃れるために知恵をしばり、その集積として広汎にして且つ精緻な科学と文明を生み出した。不老不死の仙薬を求めて遙か東海の蓬萊（日本）に徐福を派遣した秦の始皇帝、不滅の生命を獲得する羽化登仙の具体的な方法を『抱朴子』の一書にまとめた晋の葛洪等々、一見すると無益な愚行にも見える古代中国人の所作が、どれほどヒトの地理学、造船技術、航海術、そしてまた植物学、鉱物学、化学等の学問の進展に寄与したのか。中国科学史の専門家は、ヒトの文明は「西から東に伝わったものと、東から西へ伝わったものとのバランス・シートをつくれれば、中国が与えたものがはるかに大きい」（藪内清『中国古代の科学』角川新書）と述べる。

私には、近頃の学問研究が、学問のための学問、研究のための研究と、さながら知的遊戯に墮しつつあるかに見える。なにも中国だけに限らないが、ヒトとして「生きる」ことに執着し続けた古代人の努力に、我々は今こそ学問研究の基本を学ぶべきである。「生きる」ことを忘れたヒトの学問に、将来はない。

（お茶の水女子大学学長）